

幼児教育の文化性 (五)

— 講習筆記 —

倉橋 惣三

目次

- 第一 序論
- 第二 道徳教育
- 第三 宗教教育
- 第四 藝術教育

第四、藝術教育

(一) 序の言葉

今までの私のお話の大體の方針が、幼稚園の教育を、人類の持つて居ります高い文化を云ふ立場から眺めまして、即ち

教育學的の言葉を用ひますれば、文化教育的に幼稚園を眺める。このお話でありました。

そこで先づ道德ミ云ふ大きな文化の問題を考へ、宗教ミ云ふ文化の問題を考へまして、今度は藝術ミ云ふ文化を考へて見度いと思ふのであります。道德教育ミか宗教教育ミか藝術教育ミか云ふ事が、その完全なる一杯の意味に於て幼稚園にあるものではありません。幼稚園に於ては、心身を健全に發達せしめ、善良なる性情を涵養し、ミ云ふ事が目的でありまして、それ以上にまで持つて行くものではない。又此方は教育者ミして文化を以て目的を立て、居りますから、その意味で世に謂ふ所の道德教育、宗教教育、藝術教育が、幼稚園のミところでござう結びついて來るかミ云ふ事をまあ考へる譯になるのであります。

(二) 藝術教育と他の文化教育との比較

そこで、今迄の問題ミ、この藝術教育ミ云ふ言葉ミを較べて見ます時に、先づ茲に明かなる一つの相違があるのであります。道德ミ云ふ事は、人間生活に於きまして非常に高級なる發達を遂げて居るものであります。そこに極めて——何ミ申しませうか——色々な人間の普通の生活が極めて淨化されまして、又一面には人間の生活が社會的に最もよく秩序立てられまして、こゝに道德ミ云ふものが出て來るのであります。私は道德教育のミところで、二つの事を申したミ記憶して居る。一つは眞情の生活を教育するミ云ふ事ミ、一つは現實の生活訓練をするミ云ふ事ミ二つ申しました。所でその眞情に即して行くミ云ふのは、幼児期道德教育の根本の問題でありますが、眞情即道德ではありませぬ。人間の誠ミか真心ミか云ふ形で出て來ますもの、中には、實に淨化しない、訓練せられない複雑なるものがあるのであります。それ等を段々宗教に淨化された後で、立派な美はしき道德が残るのであります。又、現實ミ云ふ中で、無理をしたり無茶をしたりする事の出來ない、現實の中で色々な生活が起るのでありますが、この現實の中で起ります所の實際は、時には非常な實際主義的、

必要主義的、なものがある譯であります。それが、現實云ふそのこゝに於て、充分に秩序立てられました時に道德になるのであります、言ひ換へますれば、道德云ふ事は、生活の相當な文化的陶冶の後で出来て來ますものであります。

この意味から——これを逆に申しますと、私は何時でもさう云ふ事を申して居るご自分で思つて居りますが——幼児生活には、まだ道德云ふものがあるかないかと問題であります。幼児生活は、非道德的ぢやない、反道德的でもないですが、西洋人の所謂ノンモラルでありまして、無道德云ふご亂暴ですが、道德云ふ様な大人の世界に於て現される様な、高い洗練ご秩序ごを経て居ります様な意味に於て道德云ふものが幼児には要求されませぬし、又、ないものであるご言へるご思ふのであります。

宗教云ふ様な事も、先程も繰返し申しました如く、感謝性、信頼性、神秘性が養はれて居りますれば、宗教教育に向つて立體的に意義があるご云ふ事を申しましたけれども、幼児期そのものに直ぐ宗教性があるご言へないのであります。宗教性ごは、人間生活の非常に程度の高い高級なる所の宗教云ふのでありまして、そんな、野蠻人がやつて居ります様な原始的なものは宗教學の方では宗教ご申しませぬ。我々の宗教は餘りにも小さいのでありまして、宗教の本質ごしても大變小さいのでありまして、宗教は非常に高級なごころにのみあるものご斯う考へる。即ち幼児期には、綿密なる意味の道德性も宗教性もまだないのが當り前であります。だから文化ごして高いあの道德教育へ、宗教教育へ、さうしたら用意する事が出来るだらうかご云ふ問題にお話をした譯であります。

これご較べまして、藝術ご云ふ事であります。これは少し趣きが違ふご思ふのであります。そこをハッキリ解釋して置く必要があるご思ふのでありますが、藝術ご云ふ事も勿論人類文化の最高峰でありまして、人類文化のこの高さに於て始めて出来て居るものであります。例へば吾々が巨勢金岡の繪を見ました時に、實に人間ご云ふものはこれ程迄に高くなる

ものかと思ひます。或はベートーヴェンの音楽を聴きました時に、人間文化云ふものが、この迄高い所に上り得るものか云ふ事を驚くのであります。然し乍らこの高い所に行つて居りますものは、勿論幼児にはありません。そんな高いものは幼児には決してないのであります。然しその藝術の一番大事な問題即ち美云ふ事は、美云ふものゝ一番主なる特質云ひますか、…性質、これは幼児の生活の中にあるのであります。

もう一度他の言葉で今申した事を言つて見度いと思ひます。道徳云ふ事は、斯うするあゝする云ふ事でなく、その中心は善であります。グッドであります。善云ふ事は非常にえらい事でありまして、幼児の中には善なん云ふものゝ本質的なものは私はないと思ひます。これがさつきの意味であります。幼児に善がないと言ふは、皆さんはお怒りになるかも知れませぬが、善がない云ふ事を基礎にしてこそ、幼児には悪もない云ふ事を吾々は考へて居るのであります。幼児には悪もありませぬ。善もありませぬ。善良なる性情さか云ふ性情そのものゝ形容詞としての善はあるかも知れませぬが、彼の道徳の本質である善、そんな純粹な善云つた様なものは幼児には求められませぬ。これは聖人君子にして始めて得られるものでありまして、殆どないと言つてもいゝのかも知れませぬ。宗教の根本はさう云ふ事を信ずるか云ふ細かい話は別として、所謂聖であります。セイクレッドメスであります。感謝さか信頼さか神祕さか云ふものが、本當の人間精神になるのは聖であります。聖は、偉い名僧にはありませうし、今日人類文化の高いところにある皆様にはあるでせうけれども、幼児には聖は求められないと思ふのであります。感謝なんて云ふ事も、聖なる感謝、セイクレッドサンクス云ふ事に行かなければならぬのであります。けれどもそんな事は幼児に求められませぬ。ですから、感謝性も人間生活である云ふ事を申したのであります。

(三) 美とは

所で、その道德の中心——善はありませぬが、藝術の中心たる可き美的生活ミ云ふ事は、幼児に一杯にあるのであります。巨勢金岡のあの繪を描く事は出来ませぬ、リストのあの細かいテクニクを作る事は出来ませぬ。けれども、美ミは何ぞやミ云ふ時に、それは幼児の中にあるのであります。

美ミは何であるか——これは非常に面倒な問題で御座いませう。美學者に問ひましたならば、問へば問ふ程分らなくなる程込み入つた理窟もあるであります。けれども、取出されたる美ミは何ぞやミ云ふ事は大變でせうが、美ミ云ふものが製されて居る時に……ミ云ふのは、美を造る時でも美を鑑賞して居る時でも、美ミ云ふものが生活の中に置かれて居ります時は、これは斯う云ふ特質を持つて居るのであります。即ちそれ自身としての純粹性ミ云ふ事が大きな特質であります。美ミ云ふものを、如何なる意志に於てもそれが生み出す所の結果に於て、美にはならぬのであります。善は——グッドは、結果が相當重大なるものであります。宗教も亦さう云ふ意味の、神ミ疑念ミの關係に於て、結果ミ云ふものがあるかも知れませぬ。宗教では、一番奥深いところで、斯う言へるではありませんまいか。何故に人間が神様を信するかミ云ふ事は、神様に此方も信じて頂く爲である、斯う言へるのであります。何方も信じて頂く爲であります。信じたつて信じなくなつて向ふは同じですけれども、此方が信ずる事に依て、信じて頂く爲であります。けれども又「祈らずとも神や守らむ」ミ云ふ意味で、信じてくれないものがあるかミ考へるかも知れませぬが、信じるミ云ふ事は、信じられて居ると思ふより他ないのであります。その意味に於て、宗教ミ云ふものも——普通の人間の俗界の結果主義ではありませぬが——ここにさう云ふ結果が入つて居るのであります。

所が美的生活ミ云ふものは、全然結果が入つて居ないのであります。結果ミ云ふ事がそこに入つて來たならば、美ではなくなるのであります。これは詳しく申上げる迄もないと思ひます。結果の爲ミ云ふ事が少しでも混つて來たならば、ミ

んなに色々の調和がうまく出来て居やうが、そんな事は美なるものぢやなくなつて來ます。

もう一つは、それと同じ事を心理的な他の言葉で言ふに過ぎないかも知れませぬが、美云ふ生活經驗は、我云ふものがなくなるのであります。道德に於ては、我云ふものがなくなつて了つては道德でなくなりすけれども、充分淨化され、充分訓練されました後に、淨化されたる訓練されたる我云ふものが残つて居るのが道德でありまして、矢鱈に無我になつて了ふのが道德ぢやない。若し無我になるのが道德ならば、私は毎日寢て居ります。寢てさへ居れば悪い事をしませぬ。熟睡さへして居れば……けれども熟睡状態は、起きて居る時にさうも悪い事をして居るからせめて寢て居る時だけ罪がない云ふのですから、別に善ぢやありません。寢善なんて云ふものはありません。

宗教はこれ少し違ひまして、對象がありますから、對象の中に自分が吸込まれたりする。對象との關係に於て人間人間がぶつかつて居る、道德を較べる違つた事になりますが、自分が感謝するのでなく、人格が中心になつて來るのではないか云ふ事を申します。即ちこゝに我があります。宗教の結果、吾々が、人間生活の中では無我の様な状態になるのでありませう。實に謙遜なる犠牲精神が出来るさうであります。けれどもそれは、宗教の結果、人間同志の世界がさうなつて來たので、それは宗教に基く道德のさう云ふ關係が出て來るでありませうけれども、然し乍ら宗教そのものゝ實質に於て、信じたならば不満でなくなつて了つて、神様の方ではお困りになると思ふ。誰かゞ信じて居るがなくなつて了つた云ふのは、サブジェクトのない信仰云ふものは、實にあやしいと思ふのであります。

所がこれに較べまして「美云ふ場合には我がないのであります。これは、心理的に見ましても、極く簡單に分る事でありませう。

「昨晚はまことにいゝ月で御座いました。實にいゝ月でよく霽れました」——本當に或時間雲がすっかり霽れました、言

ふに言はれない美しい月である。けれどもその月の美しさ云ふものをヒョッミ見る人は、その時に我がない人でありま
す。月の美しさに我がなくなつて了ふから「美」になるのであります。詰りフツミあの中に行くのも、自我がなくなつて美
になる。いゝ音楽を聴いて居る時に、實に我がなくなります。いゝ音楽ごころでない。私の雄辯でさへも、皆さんの中に
は無我になる方がある。(笑聲)私は非常に喜んで居る。あの人が無我の状態になつて居る、ミ云ふ時には、私の講演が美
的になつて居る時である。併せてその人は寢善である云ふ事になつて、道德ミ藝術が合致するのであります。その、我
がなくなるミ云ふのが美の特質であります。詰り私は——よく知りませぬが——大藝術家が作品をする時には、インスピ
レーションが来る。私のところに一度も來た事がないから、そんなものか知りませぬが、インスピレーションが来る。そ
れに依て我がさうかなるさうです。さうしてずつミ駈出す。私だつてさう云ふものさへ來ればうまく書くが、生憎來ない。
(笑聲)インスピレーションが來て筆をこるんですが、私だつたらインスピレーションが來ても、筆をこつたらインスピレ
ーションがガツカリして了ふんでせう。飛んだ所に戸惑ひをして、インスピレーションミは腦溢血の別名である云ふ事
になつたら大變であります。所が藝術家の方はさう云ふものですかインスピレーションが來て書いて居るミ無我になるさ
うです。私も時に、書いて居るミ無我になつて、何を書いて居るか分らなくなりますが、實にそれでちやんこ出来るさう
であります。斯うして／＼云ふ理窟でもなし、うまく書かう／＼云ふ事は一つもないさうです。うまく書かう云ふ
氣がある中は書けないさうです。藝術にはならぬさうであります。——私は口で言ふだけです。何の事だか分らない。私
は昨日、皆様の中の方が彼處で遊戯をしていらつしやるのを見て、これも實に藝術だと思つた。私の講義を聴いていらつ
しやる時ミ、遊戯をしていらつしやる時ミ、更に顔が變つて居る、即ち無我になつて居るのであります。あんまりそんな
事を申すミ、今日のに影響するミいけませぬが、端で見て居るミおかしい様な方が、實に愉快さうにやつて居る。まあ今

日は私、参りませぬから御遠慮なく……(笑聲)實に無我の極致であります。

美ミは、出来上つたものが美かぎうかミ云ふのはこれは色々な處に行つて訊いて見て、色の調合がぎうか、音が一つ狂つて居る、ミ云ふ事でありませうけれども、生活に於て美ミ云ふのは、今の二つであります。結果ミ云ふ事に使つて居ないのであります。結果ミ云ふ事を考へて、結果ミ云ふ要素が入つて居る限り美ぢやない、この藝術品を買つて來給へ、いざとなれば元値で賣れるミ云ふのは、全く非藝術の甚しいものであります。だから、何か知らぬが氣に入つて、はたい買つて來て後で公開するところが却々面白いのであります。さうしてそこに我ミ云ふものが入つて居ない。創作でも我が入つて居ない。そこが、道德、宗教ミ一寸違つたミころであります。

そこで、あの完成したる美の作品そのものミ云ふ様な事は、これは幼児には却々難しいミ思ふ。好きこそものゝ上手なれミ言ひますが、上手こそものゝ好きなれ、であります。私は皆様のこミを一寸ひやかしましたけれども、私は如何にあすこでやらうミ思つても、スローテンポの時は實にハーツミなる様な風でありますが、私があれば踊つたつて、こても皆さんの様に無我境に入れない。何故ならば私は踊れないからです。皆さんは踊れるから、自分の手足の動きを離れて、ひざりに動いぢまふ。中には、左に廻つても構はない程でいらつしやるから、我が抵抗なく流れて行くのであります。あれが、スうやらうミ思ふミあゝ、さうだつたらう。リョーマチが痛い……こミ、これは我に還ります。すべつたり轉んだりして、我に還らぬ譯に行かない。だから先づ皆さんがお上手であるミ云ふ事も一つの條件であります。

そこで、藝術家は上手だから、書いて居る中にきつミ出て來るから、容易に無我になれるでせう。私も無我になりかけられるけれども途中でガツ／＼ミ聞へるから、スムーズに行かぬのであります。斯う云ふ事で、幼児の美ミ云ふものゝ生活的意思はさう云ふものであるミした時に、幼児から、美ミ云ふものはさうなるかミ云ふ事は別ミして、今の無我のもの

は幼児の中にあるのであります。吾々は、完全なるものを幼児に求める事は出来ませぬ。宗教も亦幼児の生活の中に完全なものを求む可きぢやありませぬ。けれども今言つた意味に於てこの美は、幼児の中に前から常にあるぢやありませぬか。幼稚園に於てこの意味に於て美的ならざるもの——あのお化粧をした先生は何も實に我が大變でせう。實に我があつてやつていらつしやれば私もお手傳を致しますが——兎に角そんな譯であります。

そこで幼児は兎に角、無結果、無我式に暮して居る。そこで、斯う云ふ結論になります。

(四) 藝術教育と幼児

藝術教育に云ふものは、藝術に云ふものを立て、それをもこにして幼児々童の教育の問題を考へて行く事ではありますが、その藝術の主なるものは幼児にあるのであります。私は——これは此處だけの話で、若し御親類にさう云ふ藝術家がお出でになりましたらば、さうか内緒にして置いて頂きますが——やれ大家で御座るの……と言つていらつしやる偉い人の中に、私から見れば幼児の方がずんま美的である場合が澤山ある。幼児の方がずんま、本當に藝術的である場合が澤山あるのであります。

そこで鐘も鳴りましたので、一つの結論で今日は終わりますが、幼児に於ては、藝術の爲に藝術教育をするに云ふよりは……藝術に云ふあの文化の山の上に行かせる爲に藝術教育をするに云ふよりは——こゝで一寸切りますが、常に藝術教育の必要の論になるに云ふのはその意味で言はれて居るのであります。今から二十年前、我國に斯う云ふ問題が流行しました時なきは、さう云ふ意味であつたのであります。さうぢやないに私はこゝで言ふ幼児の生活が藝術的だから幼児教育は一體全體兎も角もそれ自體が藝術教育であるに言ひ度いのであります。藝術への教育ではない。道徳は宗教へ、に云つた意味で藝術へに云ふのでなく、幼児の生活の本質が美的ですから、幼児の教育は盡く藝術的、美的なのであります。幼児

が美的でないから美の教育をするのでなくて、幼児が美的だから、それに相應しき教育は美的になる、斯う考へ度いのであります。

そこで藝術教育は詰り美云ふ事の教育であり、美の文化であります。これは善の文化の道德教育、又宗教教育云云ふ様なもの云ふ趣きが違つて居る。見方が變へなければならぬ。道德教育云云か宗教教育云云か云ふものは、道德乃至宗教が、その本質的な形に於ては幼児の生活にはまだないものでありまして、その極く要素になりますものはありますが、文化で謂ふ所の善……云つた様なものゝ本質はずつと複雑に發達した後でなければ成立しないのであります。隨て幼児教育云云それ等の關係は、現在の幼児生活の中さう云ふものがある云ふよりも、ずつと遙かなる先の方にさう云ふものがあつて、さうして幼児の生活を導く……云ふ言葉が強過ぎますが、志向する——指し示す、さうしたらその方向に向ける事が出来るか。善良なる性情を涵養し、云云一般的な幼児教育としての目的をやり乍ら、自らそつちへの方向を失はない様にする事が出来るか云ふ問題であります。

これに對しまして藝術教育の中心である美の經驗云ふ事は、その本質は二つの意味に考へられるのでありまして、道德云云か宗教云云か云ふものには、別段の作品はありません。詰り何所迄も、その人間の生活そのものが善であり、聖である云ふだけであります。藝術の場合に於きましては——或は繪にしましても彫刻にしましても音楽にしましても、一つの作品として外へ出るのであります。即ちその作を作つて居る事その作品云ふ事は、別になり得るのであります。道德の場合には、その人間の生活その行は別にはなりません。決して別になりませぬ。その人の生活にくつ附いて、その行があるのでありまして、それを切離す云ふ事はとても出来ないものであります。考の上で、その行云ふものを綜合して、善だ云云様な理窟は立てられますが、一々の行を、その人の生活から切離す云ふ事はとても出来ない。所

が藝術の場合はその繪を描きました時に、描く云ふ事、出来上つたプロダクション即ち作品云ふものは別に取扱ひます。勿論そこに色々な細かい關係がありますけれども、他の場合に較べれば、別の切離した取扱ひが出来るのであります。そこで、その作品そのものの中にある美云ふ理窟、それは非常にハッキリしたものであるに相違ありません。その中には、ここによりましたならば、非常な、技巧云ふものゝ力を俟たなければならぬのであります。天才は、不用意に物を作るかも知れませぬけれども、その作りました物が、何故こんなに立派な作品であるか云ふ時に、その作品の持つて居る技巧價值が勝れたものである云ふ事になるのであります。その作品は、さう云ふ特別な見方の出来るものであります。その作品の作つて行きます生活、これは又、それは別であります。お互は……申しては甚だ失禮で、皆さんの中には、藝術家も澤山いらつしやるかも知れませぬが、この私が、藝術家でない者が考へます云ふ……或作品をする時に、一々技巧的に拵へて、だから技巧的な立派な作品が出来るに斯うまあ思ひます。私が一つ繪を描く時に、さうしようか斯うしようか……紙の上に筆をなするより、筆を舐める方が多かつたりして、その結果、斯うでもないあゝでもないこやつちや、何か出来る。こゝね上げる、作り上げる。所が大藝術家の場合には、作り上げる云ふよりも、それがスツミ出来て了ひますから、全く無技巧的である様に思はれます。あの、非常な偉い修行を積みました畫家が、さつさ繪を描いて居るのを外から見て「あなたの繪は非常にいゝさうだから……」、一枚千圓だ云ふので千圓懐ろに入れて来たが、見て居るさつさ描いて了ふので「そんなに樂ならば千圓出すのは惜しいな」を考へる。ヘッポコな弟子の方は、見る目も氣の毒な程脂汗を流して一生懸命描いて居る。文章にしましても、大文豪はスツト書き流す。何でも無い。「なんだ、直きに書いて了ふから、その作品は詰らないんだ」を思つたりしますが、そのスツスツ書いた中に、出来た作品として非常に立派なものが出来て来るのであります。

そのところから考へて見ますと、作品の中に含まれて居る技巧價值と、技巧的にやること云ふ様な問題とは別になります。私達のは、作り出す手續が技巧的でありまして、出来たものは、まあ技巧の固まりと云つた様なものになつて了ふ。さうして下らぬけれども「君相當骨折つたぜ」と、作品に要された努力に依つてその價值を決めようとする。けれども作家の方から言へば、天才ならばさつさつ作つて了ふ。

茲で斯う言へませう。作る方で技巧的に作つたこと云ふ事と、出来た中に技巧價值が内容されて居ること云ふのは別の問題であります。樂々の方は技巧價值が入つて居ない様ですが、その人は、サラッさやつても充分技巧價值が出来る習練を持つて居るのであります。

そこで藝術の問題に於ては、その作品を主にして考へますこと云ふと、その作品の中に含まれたる美的價值と云ふものは、多分技巧的であらうと思ひます。ですから、作品が何故美しいか云ふ事を研究するに就ては、その中に含まれたる「うまいもんだな、速に。斯う、線が引いてある」——その人は何も、斯うやつて斯うこ考へた譯ではない。當り前です。その人にまつてはそれが當然であります。それよりヘンテコな繪を描かうと思つても、描けないのであります。所が吾々にはヘンテコな繪の方が得意でありまして、それを技巧で何かが變へようとするのであります。所が藝術家は、當り前にやつて居ればきれいなものが出る。カんで美しい聲を出さうとしないで、聲のいゝ人はひそりでいゝ聲が出る。——私なんかでも、この聲を出すのに永年苦勞して居りますし、この頃だつて茄子のお香々なんかは食べないのであります。(笑聲) けれどもその下手な者から見た技巧と云ふものは拵へたもんだ。偉い人の技巧的にやるのではないから、出来たものは技巧價值が存分入つて居るのであります。

そこで、その作品と云ふ立場からは、その藝術と云ふものは幼児にある筈のものぢやありません。幼児がそんなにえら

い作品を：：藝術價値に於て非常に勝れた作品を作る事はない。私は思ふのであります。勿論幼児が、云つた所で、幼児の中にも色々あり、先生よりはいゝ繪を描く子供だつて澤山居ります。居りますが、本當の大藝術家と比較して、幼児の繪の方が藝術的だ。云ふ事は、あれは少し言ひ過ぎた言葉と思ふのであります。そんなものが出来よう筈はないのであります。生みの苦しみ云つた様なものが藝術家にはあつて、技巧がバツキ出て來ますが、幼児はつひこの間生れた苦しみだけです。況んやそんなものが出来よう筈はないのであります。ですから人は、幼児の作品中心の藝術論云ふものは餘り問題にいたくないのであります。上野の美術學校に行つて、あの頭の毛を長くして居る諸君が「俺の作品は下手くても藝術的だ」と言つたつて、私は困つて了つて點のつけ様もないのであります。作品で點をつける——幼児の場合には、作品に藝術價値をそんなに求む可きぢやない。所が藝術教育云ふ言葉が、大人の場合：：殊に藝術が一杯に使はれる時は作品中心の意味に使はれて居りますから、その藝術教育云ふ言葉を幼児教育に持つて來て、作品中心の藝術教育に考へられて居るのであります。

所が、作品の方はさうであります。作り出さう云ふ方から行きます云ふは、美云ふ態度は、二つの事を本質とする。この間申上げました。即ちこの中に我のない事でありませう。セルフがなくなつて居る事でありませう。隨て：：申ませうか、別の事としても宜しいのであります。それ等を手段として、或結果の爲にやつて居る云ふのではない。藝術からさうなるか云ふのではなく、それがそれ自體である。作る方から言へば、自分云ふものがなくなり、作つたものゝ方から言へば、それはそれ丈の事である。この二つの點が生活態度。我々の美である。申しました。そこで、その態度。藝術家は、或作品をする時に、直きに我がなくなり、打算云ふ様なものが、慾なん云ふものがなくなつて行けるのが、大藝術家の特質なのであります。この意味に於ては、幼児の生活は實に大藝術家の生活態度に似て居るぢやないか、

等しいぢやないか、このことをこの間申上げました。幼児の作品を大藝術家の作品とは、藝術品を云ふ事に於ては全く別であります。較べ物になりませぬ。幼児は藝術家なり、なんに云ふ事を言ふ時には、くれぐれもハッキリお使ひ分けにならないければならないのは、その生活態度に於て藝術家であるに云ふ丈で立派な作品を作る人であるに云ふ意味に於て藝術家だと言ふのぢやないのであります。案外これが混亂致して居ります。これを皆様にもつゝ分りよく言ひますならば、私なんか、常に斯う言ふのであります。「私は大家である」に人にも言ふし、自分も思つて居ります。而してそれに條件をつけて、描かざる畫家であり、歌はざる音樂家であり、作曲せざる作曲家であるに、斯う言つて居るのであります。さうするに、何を言ふか人は笑ひますが、私の學説に都合よく、藝術的生活を藝術作品に云ふものをハッキリ區別して——實は出来ないが、こゝに區別して居りますのは、歌はうが歌ふまいが、出来ようが出来まいがそれは別問題であります。けれども、なまじ作りますに、これは作品で我に非ず、言つても差別がなくなりませんから、疑はなければ此方の態度だけで藝術家と言へますから、あの藝術家がインスピレーションが來てワーツにやると同じに、私も時々ワーツにやる。出來ぬ榮えなんに云ふ事は別問題であります。この意味で少しも藝術品を作らずに、實に藝術的であるキャラクターに云ふものはあります。これをハッキリ分ける爲に、言葉でもの事を申しますならば、立派な作品を作る人で、ちつとも藝術家でない人も世に澤山あるぢやありませんか。立派な藝術品を作る人で、藝術家でない人がある。

この間も或處で、夏の夜の茶話をした。色々偽造品を頻りに買ふ人があるのであります。買はせられる人がある。所で偽造品を云ふものは、御承知の様に、本物より巧い事が澤山あるのであります。イタリアの名畫を云ふものは、みんな美術職工がそれを美術館で寫しまして、それを賣つて居ります。或は書なんかでも、偽造が澤山ある。若し世の中に私の書が出て居りましたならば、大抵は偽造であでありますから、騙されない様になさらないこと……(笑聲)そこでその偽造品

——偽造云ふのは怪しくない様ですけれども、實は非常に巧い人でなければ出来ませぬ、ですから、作品としては偽造品の方が巧いかも知れないのであります。けれどもその人の生活態度は、偽造しようなんと思つて居る所に藝術家的でない所があるのであります。

斯う云ふ事を考へて、私は幼児の場合に、藝術教育云ふ事を持つて來る時に、作品云生活態度云を區別して、作品を……何も幼児に藝術品なんか云ふものを求める事は容易でない。後で別な事を申しますが。——然しその生活態度の方に於て、幼児云は何時でも我をなくするものでありますから、そこで缺いて居る所は、大藝術家であるのであります。もう小學校の上級あたりになるに、繪を描くにしても、何點貫へるだらうか云、一寸褒美を標準にして作品を書く。文展出品者の或者の如き態度になります。さうするにそれは藝術ではありません。幼稚園の子供は、餘つ程先生が悪く仕立てた子供でない限りは、そんな事を思つて書きませぬから、書いて居る事は藝術的であります。

そこで、全體を引つくるめて、斯う云ふ結論になる。藝術教育云ふ事は、その意味に於ては、幼児生活そのもの、外に何か云あつての語ではなく、藝術教育は、生活態度そのものにしては、幼児の生活の中にあるものである。それをさう云ふ風にして置きさへすれば、いゝのぢやないか。斯う云ふ事云、凡そそれは作品を本意にしての藝術的云云云言葉でありませぬから、隨て幼児の生活の全體の中に、藝術的なるものがありますから、特に藝術教育の爲にする云云よりも、幼児の生活態度に即して教育をして居れば、それは藝術教育なのであります。その意味に於て藝術教育なのであります。皆さんは幼児に歌を一つ歌はせて情操を教育しよう云お考へになつて歌はせていらつしやるかも知れませぬ。實際は幼児は色々な目に遭つて居りますね。「あんたの情操を養ふから、この歌を斯う云ふ様に歌ひなさい」云ふので、情操がきたなくなつたりする。けれども先生の計畫としては、情操をよくする爲に歌を歌はせる、これも全く意味のない事

ぢやありません。情操を教育する價値は、あの歌を云ふものに大いにあります。ありますが私は寧ろ斯う考へる。若し七三の區別をつけるならば、斯う考へる方が七の意味になるぢやないかと思ふのであります。幼兒の生活は、理窟よりも、歌に相應しい生活なのである。實に「斯るが故に々々々々々々」を論理的に刻んで行くよりも、或感しを、スミリズムの中に置かれた子供なのであります。そこで、相手が幼兒だから音楽を尊重するのであります。幼兒は、下等なる、低級なる、美的要素なき一つもないものであるから、それを教育する爲に音楽を使ふに云ふ事も三つ位の意味はありますが、寧ろ七分の意味を云ふものは、それよりも、寧ろ幼兒が藝術的なんですから音楽を云ふものを幼稚園で尊重するに云ふ事になるのであります。この意味で、幼稚園の先生は、作品がどれだけお出来になるか知りませぬけれども、これは美術學校を特にお出になつた方でないから、そんなにえらい作品は期待すべきでないと思ひますが、その全體の生活態度は藝術家的な方であれば、幼兒の教育は出来ないものであります。幼兒の生活が藝術的なものですから、幼兒にさう云ふ巧い繪を描かせようか、さう云ふ巧い歌を歌はせようか云ふ問題は別個であります。幼兒教育のさう云ふ本質に眼をつけて來た時に、斯う云ふ事が言へると思ふのであります。ですから幼兒の場合に於て、道徳教育や宗教教育を違つて、幼兒教育そのものが藝術教育であるが故に藝術教育を云ふものが幼兒の教育の中に、その意味で一應持つて來るのである。斯う云ふ事をハッキリ致して置き度いのであります。

まだ何だか私、言ひ足りませぬから、繰返し繰返し申しますから、分つた方は合圖する迄寢て居て宜しう御座います。
(笑聲)。

(五) 繰りかへし言へば

さうも幼兒が屢々幼稚園で、お門違ひの、見當違ひの取扱を受けて居る事が度々あるだらうと思ふのであります。幼兒

自身が持つても居ない生活へ道徳を要求する事が非常に強く、道徳を直ぐ持つて行つたり、幼児がまた宗教的でない、宗教に向ひ得るだけなのに、宗教を直ぐ持つて行つたりする癖に、藝術的だ云ふ所へは少しも觸れてくれない時に、随分詰らぬだらうと思ふのであります。この皮肉な實例は、皆さんが立派なる繪をかくしてお出でになる。あの美はしの繪、色ざりの繪、！子供は好きです。ですから赤い繪の具だの青い繪の具だの出して塗るのは子供は面白けれども、その繪を描いて居り乍ら、子供は直ぐ嫌になつて了ふ。寧ろ外へ出て遊び度くなる。それを先生は直ぐ、懶け者だと言言る。斯う言へるかと思ふのであります。或人はそれを單に心理的に、幼児は自由遊戯を好むと言ふのであります。その意味を今此處で論じて居る様な問題にひきつけて來ますならば、取扱つて居るものは成程これは藝術品であります。美の教育教材であります。それを取扱はせられて居る態度云ふものは、餘りにも美でないのであります。所が、外へ出て砂を弄んだりして居る時には、その作品は、幾らやつたつて所謂藝術作品は出來ませぬが、その生活態度は幼児獨特の無我無結果主義の藝術生活態度に行く事が出來るのであります。私が幼児なら、斯う言つて先生の門を開いて上げようと思ふ。「先生、藝術教育とはね、藝術作品を材料としてやる許りぢやないんです。それは藝術技能教育である。幼稚園に於ては、生活の上に藝術云ふものを置くの。今日外へ出て我を忘れようぢやありませんか。外へ出て、結果を離れようぢやありませんか。そこにこそ藝術が大きな意義を作る事が出來るぢやないでせうか。私は今こゝで藝術攻めになつて居る。」先生は分らない。こんな藝術を言言るが、それは作品の方から見た藝術で、生活態度の方から見ては、實に幼児として苦しいのであります。斯う云ふ事なきに於て、幼児の藝術教育は、生活の本質に即する事ですから、幼児の教育の中で藝術教育をするに云ふのでなく、幼児の生活そのもの、本質に即した教育は藝術教育になるのであります。それで、幼児が繪が巧くなるか音楽が巧くなるかは別の問題であります。別の問題で私が言ひますが、多分まづい繪を、本當に藝術的に造る

でありませう。まづい歌を本當に藝術的に歌ふのでありませう。一體、巧くなるミ云ふ考位非藝術的なものはありませぬよ。巧くならうミ思ふ。さうも歌の稽古が辛いもんだ、ミ云ふ……結果は巧い歌が出るでせうが、やつて居る時は實に結果主義でありまして非藝術的であります。だから、歌へば巧く歌へるが自分が歌はないミ云ふのは、詰りこれは本當の藝術教育を正しく受けなかつた證據であるミも言へるのであります。斯う云ふ風に考へまして、そこで次の問題に進みます。

(六) 生活的作品の藝術

こゝで一寸區切りをつけてまして、斯う云ふ譯でありますから……言ひ乍ら一寸飛びますが「この間論理少し飛躍致し候」一寸飛ばせませうミ云ふミ——幼稚園に於ける藝術教育は、生活態度に即して行くのみならず、藝術的作品ミ云ふ抽象的に拔出されたるものでなく、當り前の生活的作品の中で美の條件を備へさせる、斯う云ふ事が當然の事になつて來るのであります。これは何でもない事ですから、一寸驚かす爲に、分り難く、難しく言ひ出して置きました。美的作品ミ云ふ特殊なるものを主にしないで、生活作品の中に、美的なる條件を備へて置くミ云ふ事でやつて行く、斯う云ふ事でありませう。

これは例へば、斯う云ふ事でありませう。人類の藝術の發達に於きまして、總て所謂原始人の藝術は、生活實際の中に、驚く可き美の要素を備へて居るミ云ふ事が特質であります。あの原始人の中に、特別に繪ばかり描いて暮して居る繪描きであるミか、特別に歌だけ歌つてレコードに吹込んで居る音樂家ミか何ミか云ふものはなかつたのであります。

あの、漁に行きます。——これは生活ですな——その間にそこに歌が出て、その歌が堪らなく美的條件を備へて居つた。反對の方は、歌の方があつて、歌を歌ひに沖の方に出ようかと思つて居て、歌半ばにして落ちたりする事が起るのであります。所が原始人の方は、魚が來たミ云ふので行く、その間に「あゝ……」追分が出る譯であります。ですからこれは生活の中に音樂が入つて居る。

原始人は武器を作ります。今日の武器ミ云ふものは、大した實に武器でありませう。聊かブキツキョな程、武器であります。所が昔の原始人は、戦ミ云ふものも呑氣であつたでせう。昔は戦ミ云ふ命がけのものでも、美的要素を備へて居ります。緋緘ミか櫻緘ミかの粉飾をしましたが、今の軍服は、見えないのを本體ミして、帽子の上に草をつけたりする。所が昔は、成可く見える様にして「ヤア」ミやる。節をつけて「吾こそは——」ミ言ふ。昔は戦も暇だつたからでせうな。緋緘の鎧でも、爆彈が來た日には堪らないが、兎に角戦争ミ云ふ命がけの中に、美的要素を持つて居るのですから、その武器なんかでも、——今の鐵砲なんかは、一種の美は備はつて居りますけれども、別に鐵砲に飾りがしてある譯ではない。昔の人は一々紫の絲なき引きつけ、お祭に行くかぎうか分らぬ様な太刀を佩いて、弓だつて大變に氣取つて居ります。戦に行く人がその位ですから、家で働いて居る人なごも、播鉢なんかに一寸彫刻をつけます。今の奥さんは播鉢を買ひに行つて、模様がついて居るから五錢高いミ言へば買はない。「これはこれでも味増播である」ミ實用主義であります。これ（机上のトップを指す）なんかも、露骨に言へば、水が漏らなければいゝ。私は講義をして居る間水を飲みませぬけれども、チャノ模様が入つてありますので非常に慰められます。これは美術品でせうか工藝品でせうか分りませぬ。即ち生活の中に美的要素があるミ云ふのは、その意味であります。斯う申しますミ、藝術ミ云ふものは餘りにも實用主義ミ云ふ事になります。が、さうぢやない。これをやつて居る時には實用主義ぢやない。さう云ふ模様にしようかミ、我を忘れて作るのではありません。私もこれを見乍ら「成程、斯うなつて居るので滑らなくていゝ」ミ云ふ、そんな變な事を思ふのでなく、これはこれで楽しんで居る。水を飲む、ミ云ふ實用の中にこれがあつて、唯ガラスの板に傷をつけて、キラ／＼するのを眺めて居るミ云ふ、そんなのぢやないのであります。

ですから幼兒の場合は、生活態度そのものが本體の藝術生活をして居つて、幼兒の場合に濫りに作品本位に藝術教育を

する事は行き過ぎて居る云ふ結論になるのであります。だから云つて無趣味で、美云ふことなきはさうでもない云ふのではない。生活の中でやるのであります。

この意味を、一寸極端に持つて行つて見ませう。さうするに、音樂の爲に音樂を歌はせたり、繪の爲に繪を描かせたりする云ふ事は、既に幼児教育としては一寸妙だ云ふこと迄も行きさうな問題であります。斯う私結論するのぢやありません。後で他の事を申しますが、さうまで行かうとする、それ許りぢやありません。今日の幼児教育或は小學校教育、さう云ふものゝ傾向が餘りにも、從來あの小さき小児の生活を捉まへて、作品本位の藝術教育に走り過ぎて居りました。その反動としては寧ろそれを抑へて、作品の價値ではなく、生活態度の中に美的要素をさう入れようか云ふ事になつて居る。その進んで行き方に於ては、小學校に圖畫云ふものはないのであります。音樂云ふものはないのであります。總ての生活の中に音樂が入つて居り、繪が入つて居るだけで、圖畫を圖畫としてやる云つた様なこの時間は、純藝術作品の時間である云つた様な事を止めよう云ふジェネラルアートシステム云ふ事に今日はなつて居る譯であります。こゝ迄行く事がいゝか悪いかは兎に角、そこ迄考へられるのであります。私は大體に於きましてそれを併せてお聴き願ひ度いと思ひますが、大體に於きまして、幼稚園で藝術を藝術としてする云ふ事が、尠くも今迄少し偏り過ぎて居ると思ひます。それが藝術教育の名に於てそれがさう云ふ風になつて居る云ふ事を私は訂正したいと思ふのであります。私はよく悪口を言ふけれども、幼稚園は、「幼稚園音樂學校ですか？幼稚園美術學校ですか？」と悪口を言ひますのは、そんな感じを免れないのであります。

もつここれを實際的に言ひますならば、所謂今日の生活的作品として最も顯著なものは、私共の常に主張致しまする誘導保育に於ける手技の様なものであります。誘導保育の中に行はれて居ります手技云ふものは、何所迄も手技としてや

る反對のものであります。誘導保育云ふ生活テーマがあつて、その生活テーマから引出されて来て、或品物をつつ作る時に、その生活主體に依つて出来て居るのでありますから、生活的意義を持つて居る譯であります。「お人形の爲に椅子を作りませう、テーブルを作りませう、ベッドを作りませう、お蒲團を作りませう」こ言つた時に、これは、お人形云ふものが寢る云ふ生活を本體にして作つたのでありまして、ベッド藝術、蒲團藝術、椅子藝術、テーブル藝術云ふ様な事をさせるのでない事は明かである。極端に、こんな美しいものが出来ても、寢る事の出来ないベッドは許さない。誘導保育でも、人形の大きさにいゝ椅子を作らなければ絶対に許せませぬ。これまで實用的に保育が出来て行くその中へ、やつぱり蒲團は模様を氣にします。テーブルは形を氣にします。一寸赤い紐をつけませうとか、一寸線を入れませうとか云ふ事を考へます。これは詰り生活的作品の中に美的條件を入れて居る云ふ事でありませぬ。この意味で、幼稚園の藝術教育は、まご迄も生活態度の藝術的である云ふ事を中心を置いて考へた。その結果、二段の結論としては、藝術を藝術としてするんぢやない。生活的作品、生活的行動、その中へ入れて行かうとするのであります。

斯う申します皆さんは「愈々これは幼稚園の藝術味云ふものが減つて来た、さうも私は、あの音楽云ふ時間が特にあるので閉口した」或は「繪云ふのが特別あるんで、私は繪が下手で、藝術教育の指導が出来ないので困つて居つた。所が今の話を聴く云ふに、生活の中に美的條件を備へさへすればいゝ云ふ事だからこれは非常に樂になつた」云ふ言るかも知れませぬが、大いにさうでありませぬ。藝術を藝術作品として出して行く時には、一種の道樂性が混ざるものであります。いゝ加減な人間が藝術の眞似をして居る位、いゝ加減な事はないのであります。繪の下手な奴が山だが岩だからぬものを描いて喜んで居る、これを道樂主義申します。實に、下手な人が集つて演奏會をして居るのは聴いちや居られないんですけれども、暇云ふ條件に於て藝術的ですから許し合つて居るが、あの敵を討つ命がけのもの、中に入るの

は、餘つ程しつかりしたものでなければ藝術になりませぬ。——皆さんにおかしな例を引きますが、幼児の藝術を研究しますには、原始藝術を研究する事が必要であります。原始藝術を拵へたものなんぞ云ふことも嫌味なものであります。有邪氣の御婦人の様なものでありまして、見ちや居られない。斯う云ふ意味から、今日幼児教育の藝術方面の研究に材料になるのは、所謂びても、ものであります。びても、云ふのは、所謂本格藝術家が作った藝術品でない。九谷とか何とか云つたら高いでせうが、安い土瓶——一つ五錢か十錢位の——を荒物屋で賣つて居る。まさか「少し洩りますからまけて置きませう」なんぞ云ふ事は商賣にならない。その土瓶に一寸蘭が描いてある、一寸蟹が這つて居る。誰も、蟹や蘭や山水の故に買ふのではない。これが藝術土瓶なんか買ひに行く時には、その繪で買ふ。けれども、實用品にちよつと描いてあるのはびても、であります。藝術的の土瓶云ふものは、或陶工が一世一代と思つて拵へるのですから、一寸缺片一つでも百圓の値打が當然するのであります。さうしてそれはいゝものに相違ない。それは土瓶ぢやないんですね。その繪云ふ藝術です。所がびても、の方は、日給貳圓とかそこの職人が、サッササ澤山描いて行く。蘭を一萬個なんて云ふ、バツミ描きます。今日は蟹が一萬個、ミ言ふミ、チョックミ描く。だから描いて居る云ふ氣もなし、一體何を描いて居るか分らない程描いて、サッサミ出來て行く。だから一つ々は實に粗末な、ぞんざいなものであります。所がその一萬個の中に、一つか二つか三つ非常にいゝものが出來ます。大藝術家が一世一代に描いた蘭よりも、そのサッサミ描いた中にたまらなくいゝものが出來る事がある、このびても、ものが、幼兒の繪を私達に實に考へさせるのであります。びても、は其處らに澤山轉がつて居ります。然しびて、職人は、色紙を出したり、絹を擴げたりしたのは描きませぬ。そんな事をするミ、云ふときは製作品だが、今度のは藝術作品だ云ふので、實に變なものが出來て了ふのであります。私は、幼稚園の子供に形式的に繪を描かして、子供は何の氣もなく描いて居りますが、それが藝術教育だ云ふこれが非常に間違つて

居ると思ふ。何故もつて製作品と云ふ意識の中に藝術作品意識を離れて美の要素を發揮させないのでせうか。斯う云ふ問題を言ふのであります。

まあ私は大體に於て、幼稚園のさうした問題は、少し當り前に行き度いと思ふのであります。道德の場合に於て、私は道德教育のところはほんの一寸しか申さなかつたのであります——道德とは、生活から拔出されたる高い文化であります。容易に普通の生活の中に道德と名を付ける事の出来る程偉大なるものは見付らない様であります。私達は眞心の生活は御座いますし、現實に即した生活は御座いますが、これが喜であるを名を付けられる生活は滅多に出来ないであります。その道德と云ふ教育でさへも、私はあの系統保育案の中に擧げてあります様な工合に、道德訓練と名を付けないで、生活訓練と云ふ名でやらうとして居ります。あの系統的保育案の中に、生活訓練と云ふ字が擧げてあります。訓練とは、詰り善に向つて訓練する事です。訓練の狙ひ所はグッド——善であります……隨て道德だけを持つて居るものであります、それを、道德と作法と云ふ文化上の言葉を擧げてさへ生活訓練として居りますのは何の意味であるか。即ち幼児の場合に於て、道德を道德としてさせるか、作法を作法としてさせるか云ふ事を成可く避けて、生活の中に於て道德的の訓練の出来る、そこを狙つて居るから、あの生活訓練と云ふ字を使つて居るのであります。道德教育に於てさへ、生活訓練と云ふなら、幼児教育に於ける藝術教育に於ては、何所迄も生活藝術教育——生活の美的陶冶と言ひますか——それではなければならぬのであります。

(七) 美を美としての純藝術味

斯う云ふ事をまあ考へまして、これで終つちまひますと云ふに餘り其方に傾いて了ふのであります、後の事をお待ち願ひ度いのでありますが、一應この所では……餘り彼方此方考へますと翹くなつちまひますから、この所を一つうん

を考へて頂き度いのであります。

日常生活の中で美的要素を發揮させる。これは今、なまはんかにチヨコくミ藝術ミ云ふ名でやつて居るものよりも、本當に美的な價值を持つて居るものを入れて行くミ斯う云ふ風な行き方で工夫出来ないかミ思ふのであります。これが稍々さう云ふ傾向になつて居りますものは、お話かミ思ひます。

一寸又色々な事になりますが、一體あのお話ミ云ふのは……幼稚園令に於ける談話ミ云ふのは、御承知の様に、所謂生話的な話ミ藝術的な話のお話ミ、この二つを含んで居るのであります。その所謂お話ミして獨立して居りますあの話、これは實に藝術的なものなのであります。私は「童話を人の前で話す」ミ言つて、實に藝術的習練、訓練のないのにぬけぬけミやつて居るのを見ました時に、私は實にすがくしいミ思ふ。「君に今音楽を聽かせるぜ」ミ云つて私の前に來て、調子外れの聲でやられた日には堪らないでせう。歌を歌つて聽かせるミ云ふ時には、斯くもまけたら、位の聲は出て來なくちやならないのであります。(笑聲) けれども實に調子つ外れでいゝ氣持さうにして居る。その男が「まあ今日は勘忍してくれ、一杯やつて聽かせてやりてえんだ」ミ言ふなら、私は生活の聲ですから許します。「それは結構だね」ミ言つてやります。これは調子つ外れでも何でもいゝ、寧ろ調子つ外れがいゝ。けれども、歌を歌つて聽かせる時に、調子つ外れなにかやられちや堪らない。お話だつてさうだミ思ふんです。お話ミは、人間生活の色々なものから、ストーリー、テリングアートが拔出されたら藝術品であります。久留島さんのお話は實に藝術です。一つの話をつつ一つの藝術で苦心慘膽して、あそこをあゝ云ふ風にする。岸邊さんのも實に藝術品です。その流派が、それが好きか嫌ひかミ云ふ事は別問題ですが、兎に角藝術です。それを、いゝ加減にやつて居るのは實に亂暴だミ思ふのであります。だから幼児に話をするミ云ふ時には、その人は本當に、ストーリーアートミ云ふ……三味線こそ要りませぬが、藝術的なものを持たなければならぬので

あります。「猿だつたかな、猫だつたかな？。一寸待つてくれ」なん云ふ話は、人を馬鹿にして居るのであります。話したんに變つて來る話云ふものは、實に亂暴なのであります。だから私は、童話云ふものが非常に藝術だ……ストーリー・テリング・アート云ふものは、さう云ふ意味で見るのであります。

斯う言ふに、皆さんはビクッとして涼しくおなりになつたでせうが、所が遺がは皆さん、その純藝術であるストーリー・アートを、日比谷公會堂でなさるのでなく、歌舞伎座でなさるんぢやなく、大阪は花月の寄席の様敷でなさるんでもなく、幼稚園の生活の中ですつていらつしやるから、實に皆さんとしては本格的に藝術的なる童話を、何さ生活的に訓練していらつしやるから、實に敬服に價するのであります。皆さんは、童話を童話としてなさる云ふ事は幼稚園でお思ひにならないでせう。幼稚園でなく皆さんに「今日は何々御誕生日に相當致し、童話を一つお願する」云ふ事であつたならば、皆さんはそこで純藝術的にお話になるでせう。さう云ふ事が、皆さん出来る方です。これが若し逆に、皆さんが幼稚園でお話をする。「皆さん、いらつしやい。藝術のお話をします」「言つて」さて……「なん言つてやつたならば、これは却つておかしい。おかしいごころぢやない、幼児は實に楽しくない。「いゝ聲だね、先生の聲は……」「巧いね」言ふ時に、幼稚園で先生暮して居る生活觀云ふものはなくなつて了ふのであります。ですから私は、幼稚園の話は幼稚園話でなければならぬ。それはあの藝術家の話と違つて、幼稚園の話は出鱈目でいゝ、ごそんな事を申すのぢやないのです。幼稚園だからあゝなるんです。これに較べまして、さうも他のものがさう話せませぬ。——一寸皮肉を言ひます。唯、幸ひなるかな皆様は、繪にしても音楽にしても唱歌にしても、純粹藝術作品の境地にまで行かない爲に、自ら樂になつて居る事があつてあります。私は、戸倉先生を幼稚園に聘したいと思ふけれども、戸倉先生が毎日あの上手なやり方でやられたら、幼児は「ハ——」と感心して、見物氣分になつて了つて、共に踊らうとしない。「さうしてそんなに大きな身體で軽く飛べる

かと言つて、技巧を見物する。所が幸ひに皆さんは、實に親しみ深き踊り方である。感服する迄に至らない。「先生一つ御一緒に……」と行く様な——。だから皆さんが餘り藝術的にならないので、事は極めて無難に行つて居ります。

幼稚園に於ての藝術教育は、作品を本體とした藝術教育ではないのが本質である。云ふ所に私のお話を結び度いのであります。

さうか、お話が、あの藝術的ストーリーアートが、皆さんに取込まれて居る様に、繪がもつて生活の中に入り、曲譜がもつて生活の中に入つて行く様な行き方を、幼稚園としては考ふ可きぢやないかと思ふのであります。これは、そつちに偏してお話をぐつと致しましたので、もう一つこれにつけないと不十分であります。

では一寸休みます。

(八) 幼稚園と純藝術

所で斯う云ふ風に考へて來ますと、皆さんのお心持の中に起る或一つの結論を言ひませうか……氣分を言ひませうか、そつちから問題を見て行きます時に、それでは繪を繪し、歌を歌し、純粹藝術的なものを云ふものは、幼稚園に於て全然なくなる可きであるか、斯う云ふ問題であります。

これに就ては、斯う云ふ風に考ふ可きぢやないかと思ふ。先程來、原始藝術に於きましたは、生活の中に美的要素を云ふものが含有されて居るけれども、それは何所迄も藝術をそれ自體として生活から遊離して來たものでない。その標準に於て幼児教育に於ても、生活から遊離させない様にしたいと斯う云ふ意味に先程の話はなるのであります。遊離は致しません、然しその生活の中に行はれた美的要素が、二つの意味で生活の中へゴシャ／＼に入つて了つて居るのでなく、それ自體として拔出されて來る場合があり得る譯であります。

一つの場合は——これは少し理窟っぽい事になります——詰り、やつて居ります中に人間はその生活の中に、所謂道徳の真心を云つた様なもので、美的自然生活から、ヒョツとさう云ふものをやるのですけれど、然しそれがそれとして興味を持たれて来ます。人類の場合に於きましてはそれとして興味を持つだけの暇が出来て来るさうなるのでありますが、忙しい最中には何所迄も製作品であつて、その中に一寸趣味を入れるだけですけれども、それが暇になれば……もう一つ例を取りますならば、戦の最中に鐵砲を拵へる、その鐵砲にも一寸模様を入れましたが、暇になれば、武器の所は別にして、模様所だけに興味を深く持つて来るさうな事もあり得ます。挿鉢に一寸繪を描いて、忙しいが用が済んで了へば暇にあかせて美的に興味を持つ事もあります。即ち人類の美的文化を云ふものゝ發達は、暇を云ふものがあつて出て来て居るのであります。現實の生活に追はれて忙しい中に美はあるが、美は藝術として獨立に遊離して来る邊がないが、暇があるさそれが出て来て、爾來藝術なきさう云ふものは暇の問題になつて来るのであります。

幼兒の生活は、寧ろ絶対に暇であります。そこでその生活の中でやつて居りませう。例へば誘導保育で店屋を作り、店の看板がなければならぬさう云ふので繪を描く。何所迄、さう云ふ様な、繪を繪として描くのでないので、看板を描いて居る。これが非常に貴いさうであります。「さあ、繪の稽古をさせよう」さか、繪を繪として「描けるかさうかして見ませう」さう云ふのでなく、看板を描きませうさう云ふので描いて居る所が面白い。然しその看板を描いて居る中に、看板を離れて、繪そのものに興味を持つて来るさう云ふ向き方があるさ思ひます。ありましたならば、その看板は……例へば今日なら今日直ぐ必要ですが、看板は巧からうがまづからうが、店開きまで必要ですが、そこで餘り藝術を論じたのでは間に合はないので、店開きに間に合ふ事が本質でありますが、子供としては繪そのものに純粹な藝術興味の方に行く素地は充分あるのであります。この意味からして、幼兒の一方が其方へ向つて来て居る時に、そこで始めて幼稚園で藝術が藝術として

生活の中でなく一寸離れてそれ自體のものとして與へられて行く云ふ事はあり得ると思ふのであります。これは例へば誘導保育案で皆さんが頻りに問題になさる一つの點は、誘導保育案云ふものでやります云ふと、あの幼稚園令に謂ふ所の保育項目が……あの誘導生活の中に採入れられた保育項目が、保育項目であり乍ら保育項目でなくなつて了ふのが誘導保育案の特質であります。極言すれば、保育項目の單獨性をぶち毀す爲に誘導保育案が出て居る言つてもいいのであります。即ち誘導保育案では、手技を手技としてやる事はないのであります。誘導のテーマの中でさう云ふ事をやつて居るので、保育項目だからやつて居るのぢやないのであります。然るに私共の系統保育案に於きましては、課程保育として誘導保育案をあんなに主張して居り乍ら、矢張り觀察は觀察、圖畫は圖畫、唱歌は唱歌、手技は手技としての課程保育が別にあります。こゝの所を、多くの方が、非常に頭のいゝ方は殊に鋭く突込んで、矛盾して居ないか云ふ仰言るのであります。この矛盾しないか云ふ事は、私から言へば矛盾して居ないのであります。吾々誘導保育云ふ生活保育の中でやつて居る中に、幼兒自身が幼兒自身の要求程度に於て、今の、看板を離れて繪そのものに興味をすつて向けて行く、店を作る爲にやつて居ります中に、不圖その作り方そのものに向つての、巧く出来るか出来ないか云ふテクニカルの方に子供が興味を向けて來るのは當然と思ふ。折角觸れて來たのにそれをぶち毀すのは、その文化的發達を妨げる所以で、これはこれとして指導するのが當然と思ふのであります。即ち課程保育の本質は、生活の中から其方へ少し進んで來た、それに順應する爲にやるのであります。これは實に當り前の事ぢやないか。私共は花壇の植物を觀察させる爲に、初めから觀察の名に於てこれを見よう云ふのでない事は常に力説して居る。花壇に水をやる事は、觀察の初めで途中で終りださ云つていゝ程、觀察であります。何も觀察とは花壇の花をぢつて見て「長く見たらポーツとして了つた」云ふのが觀察ぢやない。水をかけてやる云ふ事に於て實物に惹きつけられて行く。そこが大きな問題で、これを或は生活觀察云つて

もいゝでせう。願くはそれでおき度い。バッタの観察は、バッタを追かける事にあるので、模型なんか持つて来るのがバツタの観察ではない。だから生きて居るバツタを追かけて「早いもんだなあ」「いやに飛上るなあ」云ふのが詰り観察の初めで、恐らく終りもそこに來るでせうけれども、水をやつて居る中に、白い花と赤い花とある事に氣が付いて如露を置いてその花を見て居たら「そんなことをして居ちやいかぬ」云ふのは亂暴だと思ふのであります。水撒き人夫には私はさう云ふ事は許しません。花を見て立止るのは生意氣だと言ひますでせうが、水をかけさせるのも實は教育ですから、その教育は、花に興味を持つ教育ですから、興味を持つ云ふ事が、如露を置いてまで、「アラ、マア！」と言つた時に先生が「色々な花に水がかゝつて、遂に濡れたるこの姿かな」云つて居るのでなく（笑聲）「赤いのね、色々あるでせう？」とか云ふところに先生がちやんこ行けるだけに其方をやつたつていゝし、やるのが當り前だと思ふのであります。我々が、味の爲に食物を食べて居るのちやありません。味だけ私に食はず云ふ人があつたら私は閉口です。「味だけ上げるから食べちやいかぬ、舐めろ」云ふのでは困る。所が私の空腹に對して、食物の本質上、腹に應へる爲にくれる食物として食べて居る味がある。味があるが、餘りにも美味い云ふ「お腹が張つたが、もう一つ……」なん云ふのは、今度は味の鑑賞だ。私は、御馳走を食べた時に美味い云ふのは失禮だと思ひます。先づ食べるのが本體かと思ひます。食べて了つて味を忘れても、餘りに此方が味なき話でありますし「もう一杯貰はうか」云つて、サーツミ食べて了ふお茶漬なんか、味ばかりやつて居たら美味くないです。そこで、その花に水をかけて居るが、花にアツミなつた丈でいゝ。そこに課程保育が起る。人形の椅子を作つて、サツサミ腰掛けたらそれでいゝが、職人ではないから、やつて居る中に椅子そのものに興味が出来て「椅子を作つて見よう、斯うして見度い」云つた時に、それをそれとしても當然ぢやありませんか。幼稚園保育項目を授ける爲に課程保育をするのでなく、生活の中からそこ迄自然に來た時に課程保育が出て來る云ふ順序になつた

事は、決して矛盾ぢやないと思ひます。

これと大體に於て似て居る問題が、今の藝術の場合もさうであります。幼兒は生活でやつて居るから、美を美としてやつて居るのぢやない。美の要素が入つて居るだけの事で、美も知らずに愉快にやつて居るだけでせうが、そこ迄興味が進んだらそれを取り出して、私の聲が變だ云ふなら「いらつしやい、やつて御覽なさい」と言つたつて構はないのであります。「一寸あんた、繪を描いて御覽なさい」子供がさつき生活の中でやつて居たから忙しかつたが、繪を繪として今度やつて見ろと言つてもいいのであります。生活の中でそこにエンパチスを置いて來れば、課程保育として當り前ぢやないか云ふのであります。斯う云ふ意味で、あの生活の中で美的要素を備ふべき大體の問題が其方にも行き得る途があると思ひます。

もう一つは、これは少し意味が違つて居りますが、今のは、その生活の中に於ける美的要素に向つて非常な興味を惹きつけられた場合であります。今度は、本來その子の元來の立場に於て天才性のあると思ふのであります。天才性のもつては、天才とは何だ云ふ事は言ひ難いのであります。先づ現實實用云ふ様な事の方に非常に向く傾きでなく、一種の抽象的な、それ自身をそれ自身として興味を持ち、其方に惹かれる様なバレントを持つて居るのを普通の天才と申します。それで、實用的タイプでなく、學問なら理論派、藝術なら創作派云ふ特殊な傾向を多分に持つて居る子供がある場合に、其方に伸びるのは當然と思ふのであります。若し幼稚園の子供全體に向つて、美を美として要求する事は、さう常に出来る譯のものぢやありませんが、その中に、其方の傾向を充分に持つて居る天才の子供がありました時に、幼稚園では何所迄も新式生活主義だからと言つて了ふのは少し亂暴だと思ふのであります。斯う云ふ譯で、矢張りその生活の中で、美が美として純粹に行はれて行く要素を持つのであります。

(九) 結びの言葉として

そこで斯う云ふ事を一つ引つくるめた結論……云ふ程でもありませんが、そこに結びつけての引つくるめた事を考へて見ます云ふと、今申した様な事の御諒解を助ける爲に、一般的の一つの理窟の様な事を申して見ますと、私共の教育に於きましても、その教育の目的となつて居り、子供をこゝ迄斯う云ふ風に考へるものは、人類が長い間に拵へました或一つの文化的發達の様なものであります。それを、後から來た子供に、斯くなせし示して行くのが普通の教育目的であります。然し教育にはもう一つの意味があつて、子供の生活の中から文化を發展さして行く。これは當然な一つの途であります。

そこで、子供の生活の中から文化を發展さして行く様な場合には、先づ子供に、この文化へ持つて來い云ふ命令を下す前に、先づ生活を豊富にして、その生活の中に文化價値を發見して行く云ふ一端を、充分に力を盡さなければならぬ。これが幼稚園の幼稚園たるところであります。然し乍らその生活の中にある云ふ事に於て行きますが、人類は長い間に文化迄來たのを、吾々は教育に於て短い間にそこ迄持つて來る。その爲には、生活は生活、文化は文化としたのでは、さう迄もくつ付きませぬので、その生活の中から文化へ行く、その行く途を吾々は矢張り認めて行かなければなりません。行く途云ふのは、今の藝術の場合に於きましても、製作品としてやつて居る中に、美なら美それ自身の興味に、微かに進んで行く子供の中から起る要求を認めて、引張つて行かなければならないのであります。斯う云ふ原理に今のはなつて來ます。唯茲に非常に問題になります事は、何故私が生活と藝術の事を言ふのにこんな事をするか云ふと、その生活の中から拔出して段々文化の方に進んで來る途を認めます。けれども吾々は、この文化へ子供を持つて來るのが目的であると共に、文化へ來る健全なる發展性を與へる事が目的である。こゝをハッキリ區別して頂き度い。何でもいゝから文化に

到達せしめ、文化を興へればいゝのではなく、文化へ發展して來る發展性を尊重して居るのであります。文化へ發展して來る自然の途ミ言ひませうか……その發展性を尊重して居るのであります。ですから、文化へ生活から行くには、生活から多少離れて進んで來ますけれども、それは何所迄も文化的內容價値の發展に連れて、生活から分離して來る事を條件としなければなりません。文化的生活價値から進むから生活から離れて來る。繪を描いて、巧く興味を持出したから、つひ儲けも忘れ、食も忘れて繪の方に行く、ミ云ふ順序でなければならぬのであります。文化價値の內容の發展に正比例して……ミ云ふ程ではないでせうが、それに比例して生活實體から離れて行く事を基準とし、それならば許す。そこに、生活から文化への發達性の原理があるからであります。然るに、若しもその文化價値內容がそこ迄行つて居ないので、まだ生活から分離して來る形になつたならば、これは困るのであります。こゝが大事な問題であります。

まあ甚だ妙な例がありますが、若しこの中にさう云ふ方がおありになりましたならば、御心配なくお聽き願ひ度いと思ひますが、月滿たすんば生れちやいかぬのであります。所謂お腹の中の子供が分離して來るのです。何時迄も分離しなかつたら大變です。子は親にくつ附いて居るものであるミ云ふので、何時迄も訓練しなかつたら大變です。人間が出來ませぬ。文化々々ミ言ふのは、月滿つからぢやありませぬか、中が充實するからぢやありませぬか。中が充實しない中に出て來るものぢやない。これは實に、こんな處で言ふ可き事がさうか知りませぬが、本當に自然の原則の一番奥底に示して居る例であります。我々の生活の中から、文化ミ云ふ獨立の子供が生れて來ます時に、その文化內容に伴はずして文化內容價値に伴はないで、生みの惱みを経て生活から分離するのが本當で、それを吾々は助け度いのであります。それを早く分離さしたら……これは實に重大な問題であります。道德なるが故に自分自身を生活の中に充實される中に、道德を道德として行つて來たりしたら、月滿たざるに生み出した道德ミ同じぢやありませぬか。殊に作法に就て私が常に言ひ度いのはそ

ことです。作法とは、人類文化の間に發展したものであります。殊に日本等に於て、足利期から徳川期に於て、色々な作法が發展して來たのであります。然し乍らそれは作法として、我々の生活、人類總體に持つて居るので、私が作法を持つて居るか否うかは別問題であります。私の作法は私の文化價値に相當して出て來るものでなく、習へば誰だつて出來るのではありません。

道德も同じですけれども——作法は形に出来ますから話がし易いのであります。道德もさうだと思ふ。——自分の價値以上の道德をする事は餘りいゝ事ぢやないと言ひ度い位ですが、そんな事をウツカリ言ふと、「俺の價値ぢやないからやらない」こ言ひ出したらきりがありませんから、道德の方ぢや我慢します。然し乍ら子供なんかの場合に、吾々は實はそこ迄熟して居る可き筈ですから、熟して居る可き事として要求されてもいゝが、子供の場合に於ては、熟して居ないのが當り前ですから、子供が餘り偉いのをやつたら、チャンチャラ可笑しいのであります。だから作法を作法としないで、生活訓練と云ふだけでやらうとするのであります。歩き方を拔出さうとしない。その生活の中でそれが相當の力で歩くだけ、それより他に本當の途はない。

この論法で、美と云ふ事も、自分の生活の中に即して來る美的價値が進んだならば、生活から分離して宜しい。私は大藝術家が、經濟的問題社會的問題、人との交際、常識的交際：：あんなものを無視して繪畫三昧に入つて居る時に、決して咎めませぬ。何故ならば、その人の文化價値は、餘りに今の普通の生活常識から離れて了ふ程、文化價値そのものが充實して居ますから、それを順を間違へて、美の教育と云ふ中に於て分離する方を先に要求したならば、これは順も間違つて居るし、一度分離したならば、もう育ちませぬ。生んで了つたならば箱の中に入れて温めたりしますが、さう云ふ事で育たないのであります。ですから、私は、幼児をその生活から人類の案出した文化へ持つて行かうと努力しますが、——

何でも、斯うする様です。發展性を自ら養はうとてやる事は、この文化價値が、人類としては行つて居るけれども、自
分としては行きつゝあるから、内容充實に比例して分離して行く行き方をしたいのであります。この内容充實に比例する
生活からの分離、こゝの所は、私共殊に幼児教育に於て大事な事と思ひます。先生が非常に高い立場にいらつしやるこ
ふも、これはもぎかしいものであります。殊に天才の先生なんも云ふのは時々困るのであります。天才先生も云ふのは、
生れ乍ら生活から分離して居る傾向を持つた方ですから、それが當り前も云ふ生活意識を持つて居るから、子供の生活に
それがついて居るかどうか分らない。殊に専門家も云ふのが幼稚園では非常に困る。専門家は多分、分離しきつて居る
所の専門家である事を誇つて居るので、生活そのものから離れて居るが、専門家たる誇りを持つて居るから、生活へくつ
付いて行く味もか、止むを得ず生活から訓練して行くも云ふ生みの悩みもいふものは、これはどうも出来ないものでありま
す。子供を生んだ事のない人、子供も云ふものは始終貰つて許り育てゝ居る人、こゝの所に非常に問題が違つて來るの
であります。詰り抽象も云ふ様なものが教育の目的ですけれども、その教育をそこに持つて行くに就ては、今言つた様な細
かい順序が當然の事になつて來るのであります。この意味で私は道德教育も宗教教育も皆考へますが、これもさうであ
りますが、然し道德もか宗教もか云ふものは、子供の中から自然にそこに行くも云ふだけではない。非常な高い文化がある
のでありまして、その文化の如何も云ふものでもつてそれへ行かうとするのであります。然し美も云ふ場合に於きまし
て、生活の美的意義は前から申して居る様な意義であります。これを抽象させたら藝術でなくなつて了ふも云ふ事にな
るのであります。これで一段落の話は終ります。もう一つ、藝術教育に就て残つて居る事があります。それは、斯う云ふ
事があります。

道德教育の場合にはその道德教育の方法を言ひますが、途して例を示すも云ふ事は却々難しい事でありまして、よく先

生は樂々言つていらつしやる。「先生のやうにしこやかにおなりなさん……。」やうに「云ふのは、べらるる」云ふ位の意味に解釋して置けばいゝ。殊に道德とは形ぢやないから、昔の人が斯うして「云つても道德の例になりませぬ。一番難しいのは從順の例話でありまして、從順の例話位、子供に全く見當違に取られる事はないのであります。えらいなあ、えらいなあ云ひますけれども、そこが偉いか分りつこないものであります。殊に、世の中には實に不道德的生活の現れをして居る人もあるのですが、こんな事は例に持つて來られます。「悪人なれども眞心なり」云つた様な事は、例に過ぎませぬ。作法の方はやつて見せる事が出來ますが、やつて見せる云ふのは、作法の本質に離れて居ります。作法は、やつて見せる云ふ事ではないのが作法の本質ですから、そこで作法云ふ問題は、その例を示す云ふ事は難しい。首の上げ方、手の動かし方云ふのは示せますが、作法云ふものゝ例を示す事は出來ませぬ。宗教經驗に就ても、例を示すのは難しいのであります。まあ佛壇に向つて跪いて居ります後姿云つた様なものが或感じを子供に與へる云ふ事は常に申しますが、それも子供に依て、例としてやる譯に行かない。宗教的生活云ふものは、子供に特に見せる云ふ事に行きませぬ、宗教觀察と言つて、觀音様の前で人が拜んで居るのを見て「觀察なら致します」と言つても、分つたものではない。

所がこれに較べて藝術は、道德や宗教と違ふと言つたさつきのお話と並べましてもう一つ違ふ所があるのは作品と云ふものがあります。作品と云ふものが生活から離れて存在して居りますから、繪を一枚描いても直ぐ例になる。例と云ふのは手本ではないが、所謂人類文化の持つて居る最高の美と云ふものゝ一例が出来るのであります。曲譜一つ自分で書かなくても蓄音機をかけて立派に例が出来るのであります。この、出せる、云ふ事が、藝術の他のものゝ違つて居る點であります。そこで藝術生活としては、この例を示して斯う爲せと云ふのでなく、その生活から段々發展して來る事を冀うて居

るのでありますが、例を樂に示せる云ふ事から、別個の問題が一つ起つて來ると思ふのであります。

道徳的高さを子供の前に表示する云ふ事、隨つて道徳的高さに對する心のある一つの謙遜なる反應云ふものを子供に經驗させる云ふ事は、餘程難しい事でありませう。よくお話なんかの中で、色々昔の聖人なんかの話をして「本當に感心だな」と言つたつて、實はよく子供には分らないのです。人間との關係は、自己との關係だけに於て生きているのでありまして、ごんな聖人でも、私との關係しない限りは實にあつさり閑したものでありまして、私は孔子様がお一人いらつしやるのも有難いが、ヘッボコな奴でも、友達が澤山居るのが、ごんなにか私には人生意義を持つて居るので、その孔子様云ふものを私から切離したら、もう一寸その所は分り難いのであります。所がこのかげで示す事の出来る作品があります。お蔭でその吾々が示さうとする文化價值の高さ……くれぐれも、そこへ子供を連れて來やうとするのでないけれども、その文化的價值の高さは持つて居る。これを示す事が出来ますから、こゝで藝術教育に於ては、道徳教育や宗教教育よりもよりの確に、高き文化に關する心的態度の經驗をさせる事が出来るのであります。道徳の方では却々そこ迄行きませぬし、宗教でも却々そこ迄行きませぬけれども、藝術云ふ一つの作品を通してします時には、難しいもんだな云ふ觀念が分る分らぬ云ふよりは、心的態度が出来るのであります。恰も自然の中に高い山があり青い空があり、何ぞ美しい輝かしい花がある、云ふのと同じ様な工合に、人類文化の中の特殊なる美を表現して居ります作品がこゝにありますから、茲で文化的價值の高さに對する心的經驗を起させる事が出来るのであります。

宗教なんかでもさうぢやありませんか。私は餘り立派に金ピカにがらくしに居るお宮に行くよりも、實に質素なる白木のお宮に行つて、却つて崇高さを感じる事が出来ます。けれども幼稚園の子供にござりまして、清楚なるお堂に連れて行つても、後に存在する宗教的意義を言つても分らない。だから宗教を大衆が感ずるのは、宗教家で、吾々を通して

考へるのであります。

さう云ふ事に較べて藝術作品ミ云ふものは、人類文化の高さの例に使ひ易いものであります。だからこの意味に於て藝術教育ミ云ふことの一面は、實に生活の中からスツミ其方へのびて来る。而も餘りに早く分離する事を抑へて行くこそ、眞實なる藝術教育であると言ひ度い。そこまで行く僅かな生活を助長する事であるのでありますが、それも問題は、折角存在する作品を通して、人類の高さに對する信仰ミ云ふものは、藝術教育の特殊なものになるのであります。この後の場合に於てこゝに掲げられたものは、繪であります。

この繪を以て子供心に崇高な心を抱かせ、このきれいな繪の前では一寸靜かに歩け、ミ云つた様な氣持で習はせた時に、繪ミ云ふものは要らぬものだ、藝術ミ云ふものは要らぬものだミ云ふ感じを子供に持たせる譯では御座いませぬ。その藝術ミ云ふ獨特なる作品文化を間違つて、人類文化的高さに對する經驗をさせるので、繪に關して感心させる所に止つて居るのではないのであります。これは非常に大事な事かと思ひます。

そこで嚴密に言へば、藝術作品を以て文化教育をして居るので、藝術作品をして居るのでないミ云ふ様な事にもなりません。

(一〇) 綜括

これで私のお話は大體終りますが、一番初めに申しました如く、幼児の教育は、幼稚園ミ云ふ中に於きましては、あの幼稚園ミ云ふ中で出来る事をするに止まる可きであつて、それを越ゆ可きでありませぬ。この意味に於て、心身を健全に發達し、善良なる性情を涵養する云ふ單純なるそこだけを幼稚園の目的ミ致して居ります。然し私は教育者であり、私は人間を教育して居るのであります。今は幼稚園の子供を教育して居りますが、その子の人間ミしての行先ミ云ふ事は、私

達は人間教育の立場から或文化價値を持つて居ります。その文化價値を幼児の生活を如何なる關係に志向させて行くか云ふ事は、考へなければならぬ問題であります。今日は、時に文化價値の高さをも云ふ教育が少い爲に、幼稚園云ふものが餘りに平板的にあるんぢやないか。勿論これは、心身を健全に發達し、善良なる性情を涵養し、云つた様な幼稚園本體の素直な目的を理解しない程、その文化價値に子供を連れて行かうとする。今度逆にそこに出て行つて了ふ文化價値がなかつたならば、幼稚園云ふものは餘りに平板なる、實に立體性の少ないものが來るんぢやないか。そこで文化價値として、道德と宗教と藝術を考へたのでありますが、それが自らみんな違つた趣きを持つて居ります。

斯う云ふ問題をまあこゝで考へたのでありまして、非常に暑い所を御勉強頂きました、私は有難く御禮申します。

(をばり)